

# 琉球大学学術リポジトリ

琉大グローバルシティズン・カリキュラムと4年間(6年間)一貫教育

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜崎, 盛康 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/41407">http://hdl.handle.net/20.500.12000/41407</a>

## 琉大グローバルシティズン・カリキュラムと4年間（6年間）一貫教育

浜崎盛康(大学教育センター長)

本年（2012年）4月から、URGCC（琉大グローバルシティズン・カリキュラム）がスタートした。このカリキュラムについては、本センター報は前号（第14号）でも特集を組み、詳しく紹介した。ここでは、この琉大グローバルシティズン・カリキュラムを、4年間（6年間）一貫教育という観点からみて、このカリキュラムが大きな可能性を持っているということを述べてみたい。

従来、4年間（6年間）一貫教育（それは共通教育と専門教育の有機的連関と言うこともできるだろう）といっても、その言うところの一貫教育において「何を一貫させようとしているのか」具体的にはあまり明確ではなく、また「誰が一貫教育を行うのか」という実施主体、および「どのようにして一貫させるのか」という点があまり明確ではなかったように思われる。これらの点に関して、琉大グローバルシティズン・カリキュラムは、以下のように明確であると言える。

まず、4年間（6年間）一貫教育において「何を一貫させようとしているのか」という点であるが、琉大グローバルシティズン・カリキュラムには7つの学習教育目標があり、これは4年間（6年間）の学士課程教育全体を通して実現すべきものと位置づけられている。すなわち、琉大グローバルシティズン・カリキュラムにおいては、7つの学習教育目標の達成を4年間（6年間）を通して一貫して行おうとしているのである。7つの学習教育目標は、具体的には、「自律性」、「社会性」、「地域・国際性」、「コミュニケーション・スキル」、「情報リテラシー」、「問題解決力」、「専門性」である。

したがって、「専門性」も1年次から、共通教育においても、専門基礎科目だけではなく、人文系科目、社会系科目、自然系科目、外国語等においても、教員は意識していることになる。実際、共通教育の理念に基づいて共通教育の授業内容は決まるとはいえ、それぞれの学問分野との関連で共通教育を提供するのであり、その意味では「専門性」が全くないという授業はあり得ないと言える。もちろん、学年が進むにつれて「専門性」は高まっていく。そのようにして、「専門性」は共通教育と専門教育の両方において4年間（6年間）一貫して教育されていくことになる。

同様に、「自律性」、「社会性」、「地域・国際性」、「コミュニケーション・スキル」、「情報リテラシー」、「問題解決力」も、1年次から4年間（6年間）一貫して教育されていく。これら6つの学習教育目標も、共通教育と専門教育の両方において4年間（6年間）一貫して教育され、達成されていくことになる。

次に、「誰が一貫教育を行うのか」という実施主体についてであるが、琉大グローバルシティズン・カリキュラムでは、実施主体として29の「学士教育プログラム」という単位ができた。これは、従来の学科や専攻課程あるいは系・コース等とは別に（これらと重なる場合も多い）、設定されたものである。29の「学士教育プログラム」のそれぞれが、琉大グローバルシティズン・カリキュラムの7つの学習教育目標を、自らのプログラムの学生に身につけさせる責任を負うことになったのである。

29の「学士教育プログラム」の組織上の位置づけは、全学教育委員会のもとに全学学士教育プログラム委員会を新しく設け、29の「学士教育プログラム」は全学の委員会のもとにあることになった。これは、いわば学科や専攻課程あるいは系・コース等が集まった全学の委員会ができて、学科や専攻課程あるいは系・コース等としてそれぞれ丸ごと全学の委員会に属することになったということである。このことの持つ意味は非常に大きい。

3つ目の「どのようにして一貫させるのか」ということについて、琉大グローバルシティズン・カリキュラムでは、いくつかの工夫がなされている。たとえば、シラバスへの学習教育目標の記載と授業を通じた実践、および絶えざるチェックと見直しである。つまり、4年間（6年間）一貫教育による学習教育目標の達成のために、自分の授業改善に関していわゆる PDCA サイクルを回すことが、各教員に求められている（そのためには、あわせて、どのような授業形態・方法をとるかということも重要である）。そのように、自分の授業のシラバスに学習教育目標を記載することで、教員は4年間（6年間）一貫教育による学習教育目標の達成ということを意識することになる。また、FD の実施も、言うまでもなく重要である。この点についても、29の「学士教育プログラム」を主な対象とした FD が既に昨年度から行われており、基本的にすべての「学士教育プログラム」が参加している。

今後は、学習成果（ラーニングアウトカム）をどう捉えるかということや、上記の意味での4年間（6年間）一貫教育による学習教育目標の達成において、初年次教育をあらためて見直し、順次性・体系性を確認することも必要になるだろう。もちろん、まだ、やるべき事は多い。

琉大グローバルシティズン・カリキュラムは、スタートした。ここでこれ以上詳しく論じることはできないが、琉大グローバルシティズン・カリキュラムは、以上のように、4年間（6年間）一貫教育による学習教育目標の達成ということに関して、大きな可能性を有しており、その着実な実施が琉球大学の学士課程教育の質を保証することになると言えよう。